

# 語用論の観点から見た 認識のモダリティ形式「カモシレナイ」について

國澤 里美

キーワード カモシレナイ 認識のモダリティ 配慮表現 語用論 世代差

## 1. はじめに

本稿は、認識のモダリティ形式「カモシレナイ」の用法について語用論の観点から論じたものである。料理を食べる前にメニューを見て、おいしいと思う場合は「おいしいだろう」のように述べ、おいしくないと思う場合は「おいしくなさそう」のように述べる。おいしい可能性とおいしくない可能性のどちらの可能性も考えられる場合は、(1B)の「おいしいかもしれない」のように「カモシレナイ」が使われる。一方、(1C)のように料理を食べた後であれば「おいしい」かどうかについて1つの判断を述べることができ、「カモシレナイ」は使えないとされている。

- (1) A: このケーキ、おいしいかな。  
B: (料理を食べる前) おいしいかもしれない。  
C: ?? (料理を食べて) おいしいかもしれない。

しかし、筆者が10代から60代までの各世代30名の日本語母語話者180名を対象に行ったアンケート調査によると、世代が下がるほど(1C)のような「カモシレナイ」の許容度が高くなる傾向が見られた。具体的には(2)の例であり、その結果を表1に示す。

- (2) 場面6: AとBはレストランで同じ料理を食べている。Aは料理が“おいしい”と思った。  
A: これ、おいしいかも (かもしれない)。

表1 料理を食べた後の「おいしいかも」の許容度(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(2)	24.7%	41.7%	31.7%	28.3%	16.7%	15.0%	15.0%

本稿では、(2)の例に見られる世代差による許容度の違いについて語用論の観点から考察し、話し手が自分の意見や認識を述べる場合、世代が下がるほど相手が異なる意見や認識を持つ可能性があることに配慮して複数の可能性を残した表現を使う傾向があることを指摘する。

## 2. 先行研究と本稿の立場

文は大きく分けて、客観的な事柄内容である「命題」と話し手の心的態度を表す「モダリティ」からできているとされている。寺村(1984)は、(3a)のように「あるコトを確かな現実の事実として述べる」場合を「確言」と呼び、(3b)や(3c)のように「確言はできないが、自分の過去の経験、現在もっている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる」場合を「概言」と呼んでいる。寺村(1984)は、本稿の考察対象である「カモシレナイ」を「概言」の中に位置付けている。本稿では「概言」のように話し手の認識を表す形式を「認識のモダリティ形式」と呼ぶ。

- (3) a. 雪が {降る/降った}。  
 b. 雪が {降る/降った} {だろう/ようだ/らしい/そうだ}。  
 (寺村 1984 : 219 (例1))  
 c. 雪が {降る/降った} かもしれない。

認識のモダリティ形式の「ダロウ/ヨウダ/ラシイ/ソウダ」は、話し手が「雪が降る」のように<1つの命題内容>を想定している場合に用いられ、(4a)のように「降る/降らない」という対立する命題内容は並べられない。一方、同じ認識のモダリティ形式であっても「カモシレナイ」は話し手が<複数の命題内容>の成立可能性を想定している場合に用いられる。このため、(4b)のように「降る/降らない」という対立する命題内容が並べられる。本稿では「カモシレナイ」は複数の命題内容が同時に成立する可能性を表す形式であると考えられる。

- (4) a. \*雪が降る {だろう/ようだ/らしい/そうだ} し、降らない {だろう/ようだ/らしい/そうだ}。  
 b. 雪が降るかもしれないし、降らないかもしれない。

先行研究でも指摘されているように、「カモシレナイ」は話し手にとって命題内容の成立が不確実である場合は(5)のように<推量>用法として使われ、命題内容の成立が確実

であっても断定の形で言い切らない場合は(6)のように<婉曲>用法として使われる。仁田(1991:102)は、「カモシレナイ」は「推し量りの表現から、婉曲的な述べ立ての表現・断定を控えた述べ立てに移り行く傾向に有る」と指摘している。

(5) 雪が降っているかもしれない。<不確実:推量>

(6) A:雪が降っているから、外で遊べないね。

B:雪が降っているかもしれないが、外で遊ぼうよ。<確実:婉曲>

以下、推量用法と婉曲用法について順に見ていき、本稿の立場を述べる。

## 2.1 推量用法

事態には話し手にとって確実な場合と不確実な場合がある。命題内容が確実な場合、例えば、(7a)のように話し手が「雨が降っている」ことを知っている場合は「降っている」と「断定」の形で言い切る。一方、命題内容が不確実な場合、例えば、(7b)のように「雨が降っている」かどうか知らない場合は「カモシレナイ」が使われる。

(7) a. 雨が降っている。<確実>

b. 雨が降っているかもしれない。<不確実>

(7b)において話し手は自分の目で「雨が降っている」ことを確認したわけではなく、本当に「雨が降っている」かどうかは不確実である。このように話し手にとって命題内容の成立が不確実であり、話し手が命題内容を<推量>している場合に「カモシレナイ」が使われる。「カモシレナイ」を用いると、(8)の「雨が降っている可能性」と「雨が降っていない可能性」のように同時に複数の命題内容が成立することを表すことができる。

(8) 雨が降っているかもしれないし、降っていないかもしれない。

このように「カモシレナイ」は同時に複数の命題内容が成立する可能性を表す形式であり、命題内容が不確実な場合に使われる。しかし、「カモシレナイ」は命題内容の可能性が1つである場合にも使える。次に、<婉曲>用法の「カモシレナイ」について見ていく。

## 2.2 婉曲用法

推量用法の場合は話し手にとって事態が不確実であるため、同時に複数の命題内容が

成立する可能性を述べるのに「カモシレナイ」が使われる。一方、(9)のように話し手が自分の目で「雨が降っている」様子を見た場合は1つの可能性しか考えられず、複数の可能性を表す「カモシレナイ」は使われない。しかし、(10)のように命題内容が確実な場合でも、相手に反論する場面において「カモシレナイ」が使われる。

(9) (雨が降っている様子を見て) 雨が降っている { $\phi$ /<sup>\*</sup>かもしれない}。

(10) A : 雨が降っているから、外で遊べないね。

B : 雨が降っている { $\phi$ /かもしれない} けど、外で遊ぼうよ。

(10)において話し手Bは「雨が降っている」ことを知っており、断定の形で言い切れるはずである。それにも関わらず「カモシレナイ」が使われている。このように話し手にとって命題内容の成立は確実であるが、断定の形で言い切らない場合にも「カモシレナイ」が使われる。このような「カモシレナイ」は<婉曲>用法である。

従来、「カモシレナイ」は推量用法を中心に考察されてきたが、なぜ断定の形で言い切れる場面で「カモシレナイ」が用いられるのかについては十分に解明されておらず、婉曲用法の「カモシレナイ」について明らかにする必要がある。このような「命題内容が確実」である場合に用いられる婉曲用法を考察するのに、従来の「命題内容の不確実性」という観点をを用いても説明することは難しい。断定の形で言い切れる場面で「カモシレナイ」が用いられるのは、複数の命題内容の成立可能性を示すことによって「相手への配慮」を表すためであると考えられる。このように婉曲用法を考察する場合には「相手への配慮」という観点を含んだ語用論的な考察が必要である。以上の点を踏まえて、本稿では婉曲用法の「カモシレナイ」について語用論の観点から考察する。

### 2. 3 婉曲用法の「カモシレナイ」の下位分類

「カモシレナイ」の婉曲用法について、平田 (2001) は話し手と聞き手が存在する対話場面においてどのように使用され、どのような効果を持つかという語用論の観点から分析している。そして、「カモシレナイ」の婉曲用法について(11)のような<間接的表現>、(12)のような<疑似的同意>、(13)のような<前置き>の3つに分類している。

<間接的表現>

(11) サトル 「終二、すこしは弱いやつ<sup>1</sup>の気持ちもわかってやってよ。…」

終二 「いい話かもしれないけど、納得できないね。まるでわかんねえ」

(平田 2001 : 62 (例 5))

## &lt;疑似的同意&gt;

- (12) 正夫 「おまえ、そんなみみっちいこと言ってねえで……」  
 杏子 「みみっちいかもしれないけど、それが私の人生だし、それが私のしあわせなんだ…」 (平田 2001 : 62 (例 8))

## &lt;前置き&gt;

- (13) 芙美 「… (略) お邪魔かもしれませんけど、水やなにか、きっと一人じゃ大変でしょう」  
 孝平 「それは、どうも」 (平田 2001 : 62 (例 7))

平田 (2001) を受けて、山岡他 (2010) は Brown & Levinson によって提示された「積極的フェイス (他者に受け入れられたい、好かれたいという欲求)」、「消極的フェイス (自分の領域を他者に邪魔されたくないという欲求)」、これらのフェイスを脅かす可能性のある「FTA (フェイス脅かし行為)」という概念に基づき、「カモシレナイ」を考察している。山岡他 (2010) は、平田の(例 5)、(例 8)の「カモシレナイ」について「消極的配慮表現」であるとして、「FTA である《反論》は相手の消極的フェイスを脅かすため、それを緩和するための配慮として、相手の見解や立場を一旦は受け入れることを意思表示して」と説明している。さらに、山岡他 (2010) は「100%の事実に対して付加されており、可能性判断の意味は完全に解除されているが、配慮表現としての機能のみが表現された特殊な用例」として(14)を挙げている。

- (14) 君は試合には勝ったかもしれないが、実力はまだまだだと思ったほうがいい。  
 (山岡他 2010 : 203 (例 3))

山岡他 (2010) は(14)の「カモシレナイ」の機能について、「後に続く《非難》が FTA であるため、そのクッションとして、『君が試合に勝った事実は否定できないが、～』と前置きしている」と説明している。(13)と(14)はどちらも<前置き>であるが、(13)は「邪魔である」ことが 100%の事実ではないのに対し、(14)は「試合に勝った」ことが 100%の事実であるという点で異なる。

先行研究を踏まえ、ここで本稿における婉曲用法の「カモシレナイ」の分類を示す。本稿は(15)のような<前置き>、(16)のような<疑似的同意>、(17)、(18)のような<間接的表現>のように大きく 3 つに分類できると考える。

## &lt;前置き&gt;

- (15) 成績は上がった {φ/かもしれない} が、実力がついたとは言えない。

## &lt;疑似的同意&gt;

(16) A: この服、かわいいね。

B: かわいい { $\phi$ /かもしれない} けど、高くて買えないよ。

## &lt;間接的表現&gt;

(17) みんなの意見は正しい { $\phi$ /かもしれない} が同意できない。

(18) 彼の言うことも一理ある { $\phi$ /かもしれない}。

<前置き><疑似的同意><間接的表現>は、話し手の主張は1つであるが、あえて「カモシレナイ」を用いて複数の命題内容の可能性を暗示するという点で共通している。一方、3つの違いは、<前置き>は話し手にも聞き手にも命題内容が確実である場合に使われるのに対し、<疑似的同意>は話し手には命題内容が不確実であるが聞き手には確実である場合に使われ、<間接的表現>は話し手にとって命題内容が確実である場合に使われる点にある。例えば、<前置き>は(15)のように「成績が上がった」という客観的な事実が成立している場合に使われる。<疑似的同意>は(16)のように「かわいい」という相手の認識が既に表れている場面で、話し手が相手とは異なる意見を述べる場合に使われる。<間接的表現>は(17)、(18)のように相手の認識は分からない場面で、話し手が「みんなの意見は正しい」、「一理ある」という自分の判断を述べる場合に使われる。

(15)~(18)において、話し手の主張は1つであり、断定の形で言い切ってもいいはずである。それにも関わらず「カモシレナイ」を用いて複数の命題内容の可能性を表すのは、「相手の消極的フェイスを脅かすため、それを緩和するための配慮として、相手の見解や立場を一旦は受け入れる (山岡 2010)」ためであると考えられる。このように婉曲用法の「カモシレナイ」を考察する場合には「相手への配慮」という観点が必要となる。相手に反論したり、批判する場面では、相手の意見や認識に配慮して複数の可能性を表す「カモシレナイ」が用いられる。

「カモシレナイ」は命題内容が不確実な場合には推量用法として用いられ、命題内容が確実である場合には婉曲用法として用いられて相手への配慮を表す。命題内容は不確実であるが相手への配慮を表すという推量用法と婉曲用法の中間的な用法として(19)、(20)が挙げられる。話し手は「カモシレナイ」を用いて、(19)では相手が「忙しい可能性」を考慮し、(20)では自分の判断が「間違っている可能性」を考慮していることを表している。

(19) (相手が忙しいかどうか知らずに)

忙しい { $\phi$ /かもしれない} けど、連絡をお願いします。

(20) 間違っている { $\phi$ /かもしれない} けど、(あなたは) 佐藤さんですか。

以上のように、「カモシレナイ」は命題内容が確実であるが相手への配慮を表す場合には婉曲用法として用いられる。

### 3. 本稿の仮説

「カモシレナイ」は話し手にとって命題内容が不確実な場合には推量用法として用いられ、命題内容が確実な場合であるが相手への配慮を表す場合には婉曲用法として用いられる。一方、命題内容が確実であり、相手のフェイスを脅かす可能性が想定できない場合は断定の形で言い切られ、「カモシレナイ」は用いられない。例えば、(21)のように話し手が料理を食べて「おいしい」と述べる場面では「カモシレナイ」は使われないとされている。

(21) (料理を食べて) おいしい { $\phi$ /?/?かもしれない}。

しかし、筆者が「カモシレナイ」の許容度を調べるために10代から60代までの各世代30名の日本語母語話者合計180名を対象にアンケート調査を行った結果、1節でも触れたように、世代が下がるほど(22)のような「カモシレナイ」が許容される傾向が見られた。

(22) 場面6：AとBはレストランで同じ料理を食べている。Aは料理が“おいしい”と思った。

A：これ、おいしいかも (かもしれない)。(=例2)

表2 料理を食べた後の「おいしいかも」の許容度(%) (=表1)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(22)	24.7%	41.7%	31.7%	28.3%	16.7%	15.0%	15.0%

本稿は、「おいしいかもしれない」について、上の世代では命題内容が不確実である場合に推量用法として用いられるのに対し、下の世代では命題内容が確実である場合であっても婉曲用法として用いられるようになってきていると考える。具体的には、料理を食べる前は、話し手は味を知らないので「おいしい/おいしくない」のように複数の可能性を述べる。この場合の「カモシレナイ」は推量用法である。一方、料理を食べた後は、話し手は味を知っているので、「おいしい」と断定の形で言い切ることができるはずであ

る。それにも関わらず、世代が下がるほど(22)のような料理を食べた後で「おいしいかもしれない」という表現が許容されるのは、世代が下がるほど話し手自身がおいしいと思っても相手はそう思わない可能性があるため、相手に配慮して「カモシレナイ」を用いるからである。すなわち、世代が下がるほど話し手自身の立場から「私にとっておいしい」と述べるだけではなく、「私以外の人にはおいしくない」という可能性も表す。このように話し手自身の認識を直接述べるのではなく、相手の意見や認識を考慮して使われる「カモシレナイ」は婉曲用法である。

本稿は次の仮説を提示する。

《仮説》話し手が自分の意見や認識を述べる場合、世代が下がるほど相手が異なる意見や認識を持つ可能性があることに配慮して、複数の可能性を残した表現である「カモシレナイ」を使う。

以下、この仮説をもとに、語用論の観点から「カモシレナイ」を考察する。

#### 4. アンケート調査

「カモシレナイ」の許容度には世代差が予想される。この違いを検証することを目的として10代から60代までの各世代30名の日本語母語話者合計180名を対象にアンケート調査を行った(資料1参照)<sup>1</sup>。アンケートは全部で20問である。20問の項目は命題内容が確実か不確実かという点に注目して設けた。その分類は、話し手にとって命題内容が「不確実」であるか、「確実」であるか、聞き手にとって「不確実」であるか、「確実」であるかの4種類である。例文は全て筆者の作例で、会話場面である。それぞれの場面において「カモシレナイ」が言えるかどうかを判断してもらい、言えると思うものには○、言えないと思うものには×、判断に迷うものには△を書いてもらった。許容度は○を1、△を0.5、×を0として百分率を計算したものである。

#### 5. 結果と考察

##### 5.1 推量用法

事態には話し手にとって確実な場合と不確実な場合があり、話し手にとっても聞き手にとっても命題内容が不確実である場合は推量用法が用いられる。推量用法について(23)～(25)の3項目を調査した。その結果、(23)の世代全体の許容度は96.4%、(24)は83.6%、(25)は72.5%と許容されやすいことが分かる。



(23) 場面1：AとBは家の中にいる。Aは車のエンジン音を聞いた。

A：お父さんが帰ってきたかも（かもしれない）。

(許容度 96.4%)

(24) 場面3：AもBも、明日のパーティーにCが来るかどうか知らない。

A：Cさん、明日のパーティーに来るかな？

B：来ないかも（かもしれない）。

(許容度 83.6%)

(25) 場面5：初めてきたレストランでメニューを見ている。

A：これ、おいしいかな。

B：おいしいかも（かもしれない）。

(許容度 72.5%)

(23)～(25)は話し手にとっても聞き手にとっても命題内容が不確実であり、複数の命題内容の可能性が考えられる。(23)において話し手は車やお父さんを直接目を見たわけではなく、「お父さんが帰ってきた／お父さんが帰ってきたわけではない／お父さん以外の人が来た」のように複数の命題内容が想定できるため、「カモシレナイ」が使われやすい。(23)と同様に、(24)においても話し手も聞き手もCさんが来るかどうかを知らず、Cさんが「来る／来ない／どちらとも言えない」のような命題内容が想定できる。また、(25)は食べたことがない料理について話している場面であり、「おいしい／おいしくない／どちらとも言えない」のような命題内容が想定できる。(23)～(25)のように命題内容が話し手にとっても聞き手にとっても不確実な場合には、複数の命題内容の可能性が考えられ、どの世代でも「カモシレナイ」が使われやすい。

## 5. 2 婉曲用法

推量用法は話し手にとって命題内容が不確実である場合に用いられる。一方、命題内容が確実である場合でも「カモシレナイ」は婉曲用法として用いられる。以下、2.3の婉曲用法の下位分類の順に見ていく。

### 5. 2. 1 婉曲用法①<前置き>

命題内容が話し手にとっても聞き手にとっても確実である場合には<前置き>として用いられる。(26)は前置きであり、この世代全体の許容度は84.2%と許容されやすい。

(26) 場面13：Bは自分がAに「怒らない」と言ったことを覚えている。

A：怒らないって言ったじゃない。

B：そう言ったかもしれないけど、今はそんなことは関係ない。

(許容度 84.2%)

(26)において話し手は自分が怒らないと言ったことを覚えており、「そう言った」という命題内容は確実である。ここでの焦点は主節の「言った／言わなかった」という可能性ではなく、従属節も含んだ文全体の「怒らないと言ったことが今も関係ある」という可能性と「怒らないと言ったことが今と関係ない」という可能性である。(26)のように相手に反論する場合は相手への配慮を表すために複数の可能性を表す「カモシレナイ」が使われる。

### 5. 2. 2 婉曲用法②<疑似的同意>

「カモシレナイ」は、話し手には命題内容が不確実であるが聞き手には確実である場合にも使われ、相手の発話を聞いて話し手がそれとは異なる意見を述べる場合には<疑似的同意>として用いられる。話し手は「カモシレナイ」を用いることで、相手の発話を全否定せず、その可能性を認めていることを表す。疑似的同意について(27)～(29)の3項目を調査した。その結果、(27)の世代全体の許容度は98.6%、(28)は92.8%、(29)は89.2%と許容されやすいことが分かる。

(27) 場面 20 : Bは事件のことについて“いい”とは思っていない。

A : あの事件のことは、もういいよ。

B : おまえはそれでいいかもしれないけど、私は納得できない。

(許容度 98.6%)

(28) 場面 8 : BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知りません。

A : Cさんは大丈夫だって言ったよ。

B : あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。

(許容度 92.8%)

(29) 場面 17 : 授業中、学生は救急車が来たのを見たが教師は見えていない。

学生 : 救急車が来た！

教師 : 救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。

(許容度 89.2%)

(27)において、話し手Bは「もういい」という相手Aの発言を聞いてから「私は納得できない」と反論している。話し手は相手の意見の可能性を一時的に認め、相手に配慮していることを表すために「カモシレナイ」を用いている。(27)は話し手と相手に意見の対立が見られる場合であるが、(28)、(29)は両者に情報差が見られる場合である。(28)において話し手Bは「カモシレナイ」を用いて相手Aの発言を一時的に認めているが、「Cさん

が大丈夫だと言ったからいい」可能性を否定し、「Cさんが大丈夫だと言ってもダメだ」と述べている。(29)において話し手(教師)は「カモシレナイ」を用いて相手(学生)の「救急車が来た」という発言を一時的に認めているが、「救急車が来たから授業を中断／中止する」のような期待される命題内容を否定し、「救急車が来ても授業は続ける」と述べている。

(27)～(29)のように、相手と異なる自分の意見を述べる場合に「カモシレナイ」を用いると、相手の意見の可能性を一時的に認めることと、相手の発言以外の可能性を暗示することができる。相手の発言を完全に否定せずに自分の意見を述べることで相手への配慮を表している。(27)～(29)の「カモシレナイ」は<譲歩>とも呼ばれる婉曲用法の1つであり、どの世代でも使われやすい。

### 5. 2. 3 婉曲用法③<間接的表現>

話し手が自分自身の意見や認識を述べる場合は断定の形で言い切れるはずである。それにも関わらず、「カモシレナイ」は<間接的表現>として使われることがある。これは「カモシレナイ」を用いて相手が自分と異なる意見や認識を持つ可能性を想定していることを表すためである。(30)は間接的表現であり、この世代全体の許容度は73.1%と許容されやすい。

(30) 場面 10 : AとBは買い物に来た。Aは服を着て“サイズが大きい”と思った。Bは試着室の外にいたのでAの姿は見えない。

A : 大きいかも (かもしれない)。

(許容度 73.1%)

(30)の世代全体の許容度は73.1%であるが、世代別に見ると、表3のように60代の許容度は41.7%であるのに対して10代の許容度は91.7%と高い。世代が下がるほど許容度が上がる。

表3 「大きいかも」の許容度(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(30)	73.1%	91.7%	81.7%	80.0%	76.7%	66.7%	41.7%

(30)のように話し手Aが「大きい」と思った場合は「カモシレナイ」を用いず、断定の形で言い切れるはずである。このような場合、上の世代では「カモシレナイ」が許容されにくい。一方、下の世代で許容されやすいのは話し手が自分以外の人物を考慮している

ためであろう。(30)において話し手Aはこの後、試着室を出てBに意見を求めることが想定でき、相手BがAの姿を見て「大きくない／びったりだ」のようにAとは異なる判断をする可能性が考えられる。話し手Aは「カモシレナイ」を用いて複数の命題内容の可能性を暗示し、自分と異なる意見や認識を持つ可能性を残すことで相手に配慮していると考えられる。

以上、①～③から婉曲用法の「カモシレナイ」は、断定の形で言い切れる場面であっても複数の可能性を残すことで相手に配慮を表す用法であることが分かる。「カモシレナイ」は相手に反論する場合は世代全体で使われやすい。一方、(30)のように話し手が自分自身の意見や認識を述べる場合は世代が下がるほど「カモシレナイ」が許容される傾向が見られる。さらに、世代が下がるほど料理を食べた後でも「おいしいかもしれない」という表現が許容されるが、この場合に「カモシレナイ」がどのように解釈されているかについて以下で見ていく。

#### 5. 2. 4 拡張した婉曲用法

話し手の感情・感覚は、話し手自身にとって明らかな内容である。例えば、空腹を感じた場合は「おなかがすいた」と言い切れ、料理を食べた後は味が分かっているので「おいしい」と言い切れる。(31)、(32)のように話し手が自分自身の感情・感覚を述べる場合は「カモシレナイ」は使われにくい。(31)の世代全体の許容度は35.3%であり、(32)は24.7%である。

(31) 場面14：Aは“おなかがすいた”と思っている。

A：おなかすいたかも (かもしれない)。

B：じゃあ、何か食べに行く？

(許容度 35.3%)

(32) 場面6：AとBはレストランで同じ料理を食べている。Aは料理が“おいしい”と思った。

A：これ、おいしいかも (かもしれない)。(=例2, 例22)

(許容度 24.7%)

(31)、(32)は「カモシレナイ」を用いずに「おなかすいた」、「おいしい」のように断定の形で言い切れるはずである。しかし、(31)について世代別に見ると、表4のように60代の許容度は20.0%であるのに対して10代の許容度は46.7%に上がる。また、(32)の60代の許容度は15.0%であるのに対して10代の許容度は41.7%に上がる。このように(31)、(32)は世代が下がるほど許容度が上がる。

表4 「おなかがすいたかも」、「おいしいかも」の許容度(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(31)	35.3%	46.7%	45.0%	48.3%	28.3%	23.3%	20.0%
(32)	24.7%	41.7%	31.7%	28.3%	16.7%	15.0%	15.0%

世代が下がるほど、(31)の「カモシレナイ」の許容度が上がるのは、「おなかがすいた／すいていない／どちらとも言えない」という話し手自身の認識の対立ではなく、「私(A)の意見」と「相手(B)の意見」という立場の対立が想定できるためであろう。すなわち、「私はおなかがすいた」と「私以外の人が{おなかがすいた／すいていない／どちらとも言えない}」という命題内容の対立である。話し手Aは自分とは異なる認識を想定し、相手に配慮している。(31)と同様に、(32)も下の世代では、話し手自身の「おいしい／おいしくない」という認識の対立ではなく、「私(A)の立場」と「相手(B)の立場」という立場の対立が想定される。Aは「おいしい」と思っているが、Bが「おいしい」と思うかどうかは分からない。話し手Aは「カモシレナイ」を用いて相手Bは「おいしくない」と思う可能性があることを暗示し、相手への配慮を表している。(31)も(32)も、相手が話し手と異なる認識を持つ可能性が暗示されるため、(31)ではAの発言を受けてBは「じゃあ、何か食べに行く?」と提案しており、(32)ではAの発言を受けてBは料理の味を確認したり、意見を述べたりすることが考えられる。上の世代では話し手が自分自身の感情・感覚について述べる場合は断定の形で言い切る。一方、下の世代では「カモシレナイ」を用いることで相手の意見や行為を期待し、相手からの反応を待っていることを表すと考えられる。

このように(32)(=例 33)は世代が下がるほど許容度が上がるが、下の世代であっても(34)の「カモシレナイ」は許容されにくい。

(33) 場面6：AとBはレストランで同じ料理を食べている。Aは料理が“おいしい”と思った。

A：これ、おいしいかも (かもしれない)。(=例32)

(許容度 24.7%)

(34) 場面7：AとBはレストランで同じ料理を食べている。Aは料理が“おいしい”と思った。

B：これ、おいしいね。

A：うん、おいしいかも (かもしれない)。

(許容度 16.7%)

表5 「おいしいかも」の許容度(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(33)	24.7%	41.7%	31.7%	28.3%	16.7%	15.0%	15.0%
(34)	16.7%	28.3%	16.7%	15.0%	16.7%	11.7%	11.7%

(33)と(34)の違いは、(33)はAが相手Bの意見を知らずに発言しているのに対し、(34)は相手Bの「おいしいね」という同意要求に対してAが自分の意見を述べている点である。(34)のように相手に同意を求められている場面で期待されている答えは「おいしい」である。もし相手に同意できない場合は同意できないと伝える必要がある。求められている答えが1つである場合に「おいしい／おいしくない／どちらとも言えない」のような複数の回答を示すことは不適切であり、「カモシレナイ」は使われにくい。

(34)と同様の理由で、(35)、(36)のように相手の「痛い?」、「合格したんだって?」という質問に対して自分の認識を述べる場合にも「カモシレナイ」は使われにくい。

(35) 場面 12 : Bは“痛い”と思っている。

A : 怪我、大丈夫? 痛い?

B : うん、痛いかも (かもしれない)。

(許容度 13.1%)

(36) 場面 19 : BはD高校に合格したことを“嬉しい”と思っている。

A : D高校に合格したんだって?

B : うん、そうなんだ。嬉しいかも (かもしれない)。

(許容度 11.9%)

表6 「痛いかも」、「嬉しいかも」の許容度(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代
(35)	13.1%	13.3%	11.7%	20.0%	11.7%	8.3%	13.3%
(36)	11.9%	18.3%	13.3%	5.0%	16.7%	5.0%	13.3%

(35)、(36)は世代に関係なく使われにくい。(35)において相手Aが求めている答えは「痛い」かどうかということである。求められている答えが1つである場合に、複数の命題内容の可能性を表す「カモシレナイ」を用いると相手の期待を無視することになり、不適切である。同様に、(36)において「合格した」ことから「嬉しい」という気持ちは想定しやすく、相手AはBの喜びの気持ちを引き出そうとしている。(36)において複数の命題

内容の可能性を表す「カモシレナイ」を用いると相手の期待を無視することになり、不適切である。下の世代であっても、相手が求めている答えが1つであると考えられる場面では「カモシレナイ」は使われない。

## 6. おわりに

本稿では、認識のモダリティ形式「カモシレナイ」の用法について相手への配慮という点に注目して語用論の観点から考察した。その結果、世代が下がるほど「(料理を食べて) おいしいかも」、「(空腹を感じて) おなかすいたかも」のような表現が許容される傾向が見られた。本稿は、従来モダリティ形式を使わずに断定の形で言い切る場面において「カモシレナイ」が許容されるようになっているのは、世代が下がるほど相手が異なる意見や認識を持つ可能性があることに配慮し、複数の可能性を残した表現を使うためであると主張した。

## 注

- 1 この調査は、國澤 (2008) で行った調査を基としている。國澤 (2008) の調査では10代から50代までの各世代10名の日本語母語話者50名を対象とした。今回は調査対象者に60代を追加し、さらに各世代を30名ずつに増やした。

## 参考文献

- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universal in language usage*, Cambridge University Press.
- 小野正樹・山岡政紀・牧原功 (2009) 『『かもしれない』の談話機能について』『漢日理論 言語学研究』沈力・趙華敏編, 学苑出版社, pp.26-30
- 國澤里美 (2008) 「婉曲用法としてのカモシレナイと視点」『日本文化學報』37, 韓国日本文化学会, pp.5-19
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 平田真美 (2001) 『『カモシレナイ』の意味—モダリティと語用論の接点を探る—』『日本語教育』108, 日本語教育学会, pp.60-68

- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』 明治書院
- 三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学篇』 26, 大阪大学文学部, pp.35-47
- (1993) 「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』 61, 大阪大学国語国文学会, pp.36-46

### 謝辞

本稿は2012年3月17日に行われた「大葉大学応用日語学系学術検討会」で口頭発表した内容を基としている。貴重なご助言をくださった方へ心からお礼申し上げます。また、調査にご協力いただいた方にも厚くお礼申し上げます。



## 資料 1

調査時期：2011年4月18日～5月25日

調査項目：全て友達との会話場面

- 1) 場面： AとBは家の中にいます。Aは車のエンジン音を聞きました。  
A「<Bへの言葉>お父さんが帰ってきたかも(かもしれない)。」
- 2) 場面： AもBも家の外にいます。2人は自分たちの方に向かって救急車が近づいている様子を見えています。  
A「<Bへの言葉>救急車が来たかも(かもしれない)。」
- 3) 場面： AとBが明日のパーティーについて話しています。2人とも、Cが参加するかどうか知りません。  
A「Cさん、明日のパーティーに来るかな？」  
B「来ないかも(かもしれない)。」
- 4) 場面： Bは全部見られなかったことを「残念だった」と思っています。  
A「昨日、C校の学園祭に行ったんだって。どうだった？」  
B「楽しかったよ。でも、時間がなくて全部見られなかったのは残念だったかも(かもしれない)。」
- 5) 場面： AとBはレストランに来ました。今、メニューを見えています。  
2人とも初めて来た店なので、味は分かりません。  
A「これ、おいしいかな。」  
B「おいしいかも(かもしれない)。」
- 6) 場面： AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が「おいしい」と思いました。  
A「<Bへの言葉>これ、おいしいかも(かもしれない)。」
- 7) 場面： AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が「おいしい」と思いました。  
B「これ、おいしいね。」  
A「うん、おいしいかも(かもしれない)。」
- 8) 場面： BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知りません。  
A「Cさんは大丈夫だって言ったよ。」  
B「あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。」
- 9) 場面： BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知っています。  
A「Cさんは大丈夫だって言ったよ。」  
B「あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。」
- 10) 場面： AとBは一緒に洋服店に来ました。Aは今、試着をしています。Aは洋服を着てみて、「サイズが大きい」と思いました。Bは試着室の外にいるので、Aの姿は見えません。  
A「<Bへの言葉>大きいかも(かもしれない)。」
- 11) 場面： AとBは一緒に洋服店に来ました。Aは今、試着をしています。Aは洋服を着てみて、「サイズが大きい」と思いました。Aは試着室の外に出て、Bに試着した姿を見せました。  
A「<Bへの言葉>大きいかも(かもしれない)。」
- 12) 場面： AはBの怪我を心配しています。Bは「痛い」と思っています。  
A「怪我、大丈夫？痛い？」  
B「うん、痛いかも(かもしれない)。」
- 13) 場面： Bは自分がAに対して「怒らない」と言ったことを覚えています。  
A「怒らないって言ったじゃない。」  
B「そう言ったかもしれないけど、今はそんなことは関係ない。」
- 14) 場面： Aは「おなかはずいた」と思っています。  
A「おなかずいたかも(かもしれない)。」  
B「じゃあ、何か食べに行く？」
- 15) 場面： AがBを心配しています。Bは「疲れた」と思っています。  
A「どうしたの？元気ないよ。」  
B「うん、疲れたかも(かもしれない)。」
- 16) 場面： ここは学校で、今は授業中です。学生も教師も救急車が校内に入ってきたのを見えています。  
学生「救急車が来た！」  
教師「救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」
- 17) 場面： ここは学校で、今は授業中です。学生は救急車が校内に入ってきたのを見えています、教師は見えていません。  
学生「救急車が来た！」  
教師「救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」
- 18) 場面： ここは学校で、今は授業中です。教師は救急車が校内に入ってきたのを見えています、学生は救急車が来たことを知りません。  
教師「<学生への言葉>救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」
- 19) 場面： BはD高校に合格したことを「嬉しい」と思っています。  
A「D高校に合格したんだって？」  
B「うん、そうなんだ。嬉しいかも(かもしれない)。」
- 20) 場面： Bは事件のことについて「いい」と思っています。  
A「あの事件のことは、もういいよ。」  
B「おまえはそれでいいかもしれないけど、私は納得できない。」